第１７回　ちゅうでん教育振興助成（平成２９年度）

報告書資料　支援 - ３９

学校名・団体名	高森町立高森中央小学校
ＨＰアドレス	http://es.higo.ed.jp/takamoes/
コ　ー　ス	学校支援
活動・研究 テ　ー　マ	豊かな思考力・表現力を身に付けた高森の子どもの育成

〈活動・研究の意義、目的〉

熊本地震は学校や子どもたちの生活する故郷に大きな影響を与えた。復興に向けて前向きに努力する町の人々の姿を目にしながら、子どもたちは日々の学びを行っている。そのような中、現在の教育界においては、これからの国際社会を生き抜く上で必要とされる情報活用能力を児童に身に付けさせることが注目され、次期学習指導要領においてもその重要性が増してきている。そこで、本年度は恵まれた ICT 環境をいかした情報発信型の授業デザインを構築し、故郷に観光客を呼び戻すような実践（復興が進む様子や再発見した地域のよさを伝える）を行うことをねらいとしている。またこれらの実践は、校内研修を中心に実践研究に取り組み、その成果を広く公開していきたい。特に JAET 和歌山大会や毎年行なっている本町の研究発表会では、多くの実践報告を行いたい。

＜活動・研究報告＞（時期、内容、成果や子どもたちへの効果などを記入。**A4 用紙 1～2 枚**でおまとめください。）

＜対象者＞
高森町立高森中央小学校に所属する全児童・全職員・全保護者を対象とする。
＜実施教科＞
主に社会科・体育科・総合的な学習の時間等で、タブレット端末等の ICT を活用した授業を通じて、思考表現型の授業への改善を図るとともに、プログラミング教育等の新しい領域への実践を展開する。
＜活動のねらい＞
・次期学習指導要領でも重視されている、思考力・表現力を中核とした情報活用能力やコミュニケーション能力の育成を進める。校内研修を中心とした授業実践の積み上げを行い、広く公開していく。
・情報発信型の授業デザインによる主体的な学びの実現することで、深い学びへとつなげる。
＜活動の特色＞
・熊本地震の復興につながる情報発信型の授業デザインを展開し、地域に対する愛情を育てる。情報発信を単元週末に位置付けることで、情報モラル及び情報活用能力の育成も同時に行う。
・タブレット端末を活用した思考表現型の授業を展開し、対話的学びを活性化する。同時に辞書や図書資料を積極的に活用し、タイピングや書くことを通して自分の考えを表現する力を育成する。
・次期学習指導要領を念頭にプログラミング教育を展開し、小学校でのプログラミング教育のあり方を検討する。指導内容の検討や授業プランの作成を行い、小学校教員による指導体制を確立する。
＜活動時期＞
・活動時期は平成２９年５月から平成３０年３月とし、ICT 環境をいかした授業に継続的に取り組み、学校全体で先進的実践を行った。
・研究成果の発表として、JAET 和歌山大会での実践報告（１１月２４日～２５日）、高森町「教育の情報化」研究発表会にて報告（１２月１日）を行った。
＜活動内容＞
①熊本地震の復興につながる情報発信型の授業デザイン
・社会科や総合的な学習の時間で子供たちが再発見した地域の良さを題材にした「ふるさと応援 CM」（6 年）や「ふるさと案内パンフレット」（6 年）、地域の偉人紹介新聞（4 年）等を作成した（図１）。作成した作品は本校のホームページに「学びの部屋（情報発信）」を設置・掲載することで、情報を発信し、ふるさと復興の一端を担うことができた。また、6 年生が作成した「ふるさと案内パンフレット」は、本年度発表を行った英語教育強化拠点事業の発表会において、参加者に配布し、本町の魅力や復興の様子について発信することができた（図２）。

（図１　地域の偉人紹介新聞を学校 HP で発信）

（図２　研究授業での配布の様子）

②タブレット端末を活用した思考表現型の授業展開
・社会科では家庭への持ち帰りを通して、学習のまとめや資料の読み取り行い、授業と家庭学習をつなぎ、児童同士の学び合いの活性化を図った。図３は、家庭にタブレット端末を持ち帰り、地域安全マップを作成する様子である。資料を再読し分かったことや、地域で調べて発見したことをマップに書き加え、オリジナルマップを作製した。

（図３　タブレット端末持ち帰りによるマップ作製）

・体育では、撮影ガイドを活用した実践を行い、タブレット端末を活用した技能習得の向上を検証し、その成果を明らかにした。
・総合では、タブレット端末を活用した新聞や CM 等の作成を通して情報活用能力の向上を図った。特に動画ソフトを活用した CM づくりや学校プロモーションビデオ作成では、お互いに協力しながら作品を作りあげることができた。

③プログラミング教育の展開
・近隣中学校職員と連携した小学校におけるプログラミング学習を展開した。本年度は特に小学校担任が実践をすることをベースに実践研究を行った。中学校職員のアドバイスを受けながら授業づくりを行い、子どもたちの実態にあった実践を行うことができた。図４は、中学校技術科職員と一緒に授業を行っている様子である。作成した作品は、熊本県の ICT コンテストに出品し高い評価を得ることができた。

（図４　プログラミング学習の様子）

④教員研修
・校内研修では、授業での ICT 活用に詳しい有識者を定期的に招聘し、取組の評価をしてもらうとともに、先進的な取組についてアドバイスをいただいた。図５及び図６はその時の様子である。
・様々な立場から積極的な意見交換が行えるよう参加型の校内研修・授業研究会を実施し、若手とベテランの交流を促した。若手のアイデアはベテランの刺激となり、ベテランの技術は若手のアドバイスとなった。
・プレゼンテーションソフトを活用した全職員による実践発表（年２回）を行い、情報活用能力育成を図った。校内研修として全職員による授業公開（研究授業等）を行い、学校総体として研修を進める。
・校務の情報化に関する研修を行い、校務の効率化を図り、教材研究等の時間を十分確保することができた。この取組は全日本教育工学協議会和歌山大会において、学校情報化先進校に認定された。
・視察研修として日本教育工学会全国大会及び研究会に各一名参加、全日本教育工学協議会和歌山大会には４名参加、教育の情報化フォーラムには４名参加と ICT 活用の先進的事例を学ぶ場へ積極的に参加することができた。研修で学んだ知識を本校の実践にいかすことができた。

（図５　研究授業の様子）

（図６　有識者の先生の評価）

⑤研究発表
・全日本教育工学協議会和歌山大会において、本校職員３名が社会・体育・特別支援教育での実践成果を発表した。
・１２月１日に実施された平成２９年度高森町教育の情報化研究発表会において研修成果を発表することができた。

３．子どもたちへの効果
・地域のよさや復興の姿を伝える実践を継続して展開することで、進んで地域に出かけていき、調べ学習を行うなど、地域に対する愛情や自尊感情を育成することができた。
・学校全体で思考表現型の授業を展開し、対話的な学びにつなげていったことで、学習意欲が向上し、主体的な学習態度の育成につながっていった。
・情報発信型の授業展開を行うことで、協働で学ぶ機会が増加し、子どもたち自身の結びつきも強くなっていった。その結果、授業中に限らず学び合う場面が増加し、学力の向上につながっていった。